

叙事詩の宗教哲学
—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXVI) ¹—

茂木秀淳 社会科学教育講座

キーワード：モークシャダルマ、ダルマ、ハーリタ、厭離、時、

[264 章](前稿からの続き) (D.272 章、9811-9823, K.278 章)

- (12) しかしサラスヴァティー神は再び、掌を合わせたサティアに鹿を(投げ入れるのを)求めた。²サティアは鹿を抱擁して³、「去るべし」と指示した。
- (13) するとその鹿は八歩行って、戻ってきた。「聖者よ、私を殺して下さい、サティヤよ。殺されれば私はよき場所に行くでしょう。」
- (14) 私の眼をあげますから、それで、天のアプサラスをごらんください。偉大なガンダルヴァの種々の宮殿をごらんください。」
- (15) そこで、サティアは輝く世界を (surucira 天界) 見て、欲望に満ちた目で鹿を見て、殺害して天界に住むことを望んだ。
- (16) しかし、森に長い間住んだ鹿はダルマとなって、彼の罪を贖った⁴。(そして言った。)[「しかし (hi)、これ (殺生) は祭式の規定ではない⁵」。
- (17) 鹿の殺生を意図する彼の心によって、その時大きな苦行の熱力 (tapas) は完全に失われた。それゆえ、殺生は祭式に属するものではない。
- (18) そして、尊きダルマは、自ら(祭主として)サティアがその祭式を祭るの助けた⁶。そしてバラモンは(新たな)苦行によって妻と最高の合一⁷達した。
- (19) 不殺生は完全なダルマであり、殺生は祭式とは結びつかない⁸。真実を説く者たちにとってダルマとはいかなるものか⁹、私は汝に真実を語るであろう。

[265 章] (D.273 章、9831-9854, K.279 章。この章は、MBh.III.201 Dharmavyādha の教説の章とパラレルであり、当該箇所には、上村勝彦教授の和訳がある。(上村 [2002]:pp.114-116))

ユディシュティラは言った。

¹本稿は『叙事詩の宗教哲学— Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXV)—』(信州大学教育学部研究紀要第 117 号 2006 年 3 月)に続くものである。略号などは前稿に準じ、本稿で用いる主なものは以下のとおりである。

- Hopkins[1901]: E.W.Hopkins, Yoga-technique in the Great Epic, JAOS vol.22, pp.333-379, 1901.
- Edgerton[1965]: Franklin Edgerton, The Beginnings of Indian Philosophy, London, 1965.
- Bedekar[1968]: V.M.Bedekar, The Doctrine of the Colours of Souls in the Mahābhārata: Its Characteristics and Implications, Annals of the Bhandarkar Oriental Research Institute, vol.48-49, 1968, pp.329-338.

²P. harinaṃ D.,K.: harinaḥ D.,K. では、ab 句の主語は鹿であり、鹿がサティアに自分を投げ入れるのを求めた、という意味になる。この方がわかりやすい。

³P. satyena saṃpariṣvajya D.,K.: satyena sa pariṣvajya Cn. saṃpariṣvajya, sprṣtvā / etena alambhādīparyagnikaraṇāntaṃ lakṣyate / paryagnikrātān arṇyān utsrjanṭīti sāstradrṣṭyā /

⁴niṣkr̥tim Cv. niṣkr̥tim, tasya avidhinā kṛtasya yajñasya puṇyahrāsākhyaparīhāram /

⁵na hy(D.,K.: tu) asau yajñasaṃvidhiḥ Cp. yajñasaṃvidhiḥ, yajñapūrṇatāhetuḥ / Cs. yajñasaṃbandhiprāyaścittam /

⁶yājyāta (augmentless imperfect) Cn. aḍabhāvah āṣaḥ /

⁷P. samādhānaṃ ca bhāryāyā Cp. samādhāne ceti pāṭhe, yajñasaṃbandhāne sati / bhāryāyā itī tṛtīyārthe ṣaṣṭī / bhāryāyā saha tapasābhīmsātmakena sa brāhmaṇaḥ paraṃ paramātmānaṃ sattvaśuddhitatvajñānadvārālebbe /

⁸P. hīṃsā yajñe 'samāhitā D.,K.: hīṃsādharmas tathā hitaḥ

⁹P. yo dharmah satyavādīnām D.,K.: no dharmah satyavādīnām Cn. yo dharma itī pāṭhe, kiṃ tat satyam yaḥ satyavādīnām dharmah / ya itī vidheyāpekṣaṃ puṃstvam /

- (1) 人は、どうして悪人 (pāpātman) となるのか。どうしてダルマを為すのか。人は、何によって厭離に達するのか、あるいは何によって解脱に至るのか。

ビーシュマは言った。

- (2) 汝はあらゆるダルマを知っている。(それを) 確固としたものにするために汝は尋ねるのであろう。根本から聞くべし、厭離を伴う解脱を、罪を、ダルマを。
- (3) 五種の認識対象に対して、まず願望が生じる¹⁰。それら (の認識対象) を獲得した後¹¹、愛着 (kāma) が、あるいは嫌悪 (dveṣa) が生じるのである、パーラタ族の雄牛よ。(Cf.MBh.III.201.2)
- (4) それから、人は、その対象を得ようとする¹²。そして行為が始まるのである。望ましい色、香りを繰り返し得ることを望むのである。(Cf.MBh.III.201.3)
- (5) それから執着 (rāga) が生じ、それに引き続いて嫌悪 (dveṣa) が生じる。それから貪欲 (lobha) が生じ、それに引き続いて迷妄 (moha) が生じるのである。(Cf.MBh.III.201.4)
- (6) 貪欲と迷妄に支配され、執着と嫌悪をもつ者には、ダルマへの意識 (buddhi) は生じない。(その人は) 偽りからダルマを行なうのである。(Cf.MBh.III.201.5)
- (7) 偽りからダルマを行なう者は、財宝の詐取も好む。偽りによって財産が成就されると、クル族の息子よ。(Cf.MBh.III.201.6a-d)
- (8) そこで自覚して¹³、友人や賢者によって止められても、罪を行なうのを望むのである、パーラタ族よ。(Cf.MBh.III.201.6ef-7ab)
- (9) (彼は) 論理的で¹⁴規定に従った¹⁵返答をする。しかし彼には、執着と迷妄から生じる三種のアダルマが¹⁶増大している。(Cf.MBh.III.201.7cd-8ab)
- (10) (彼は、三種のアダルマの) 悪事を思い、語り、行なう。善き人々は、アダルマを行なう者の多くの欠点を見るのである¹⁷。(Cf.MBh.III.201.8cd-9ab)
- (11) 悪事をなす者には同じ性格の者が友人となる。彼 (pāpakarmin) はこの世では安楽を得ない。どうして来世で得ることがあろう。(Cf.MBh.III.201.9cd-10ab)
- (12) 悪人とはこのようである。次に、ダルマを本性とする者について私の言うことを聞くべし。善のダルマをもつ者がどのようにして善を得るか、を。(Cf.MBh.III.201.10cd)
- (13) まずこれらの欠点を英知によって知り、快と苦に精通して¹⁸、善き人々に仕える人¹⁹、(cf.MBh.III.201.11a-d)
- (14) 彼 (のダルマ) は、善き人々と共に振舞い、そして (その) 習慣によって、大きくなる²⁰。(彼の) 英知はダルマを喜び、そして彼はダルマを助けとして生きるのである。(Cf.MBh.III.201.11ef)

¹⁰ icchā puurvaṃ pravartate MBh.III.201.2ab: vijñānārthaṃ manuṣyāṇāṃ mano pūrvaṃ pravartate / (認識のため、人にはまず意欲が生じる。上村 [2002]: まず最初に思考器官が働きます。)

¹¹ P. prāpya tāt jāyate D. prāpyaikam jāyate K. prāpyatām vartate

¹² tatas tadarthaṃ yatate yatate の主語は、kāma と dveṣa か。N. は tadarthaṃ を、kāmyasya prāptaye dveṣyasya hānāya ca と注記している

¹³ P.,D.,K.: tatraiva kurute buddhiṃ MBh.III.201.6: tatraiva ramate buddhis (意識は、財産に喜び)

¹⁴ nyāyasaṃbaddhaṃ Cp. nyāyasaṃbaddhaṃ, vyāyasaṃbaddhaṃ / Cv. uttaranyāyasaṃbaddhaṃ, kutarkākhyanyāyasaṃbaddhaṃ /

¹⁵ P. vidhiyojitaṃ D.,K.: vidhicoditaṃ Cp. vidhiyojitaṃ, durdaivenopasthāpitaṃ/(運悪く生じたもの)

¹⁶ adharmas trividhas Cn. trividhaḥ, kāyiko vāciko mānasaś ca /

¹⁷ P.,D.,K.: doṣāṇ paśyanti sādhaḥ MBh.III.201.9b: guṇā naśyanti sādhaḥ (よき性質は減する)

¹⁸ P.,D.: kuśalaḥ sukhaduḥkhānāṃ K. kuśalaḥ tu sukhārthāya MBh.III.201.11a kuśalaḥ sukhaduḥkheṣu

¹⁹ D.,K. はこの詩節の前に、次の一行を挿入している。 kuśalenaiva dharmeṇa gatim iṣṭāṃ prapadyate /

²⁰ P.,D.,K.: tasya sādhusamācārād abhyāsac caiva vardhate MBh.III.201.11ef tasya sādhusamārambhād buddhir dharmeṣu jāyate

- (15) そして彼は、ダルマに基づいて財産が得られるように意を用いる (*kurute manah*)。彼は、徳性があると見るところには、どこにでもその根に (成長のために) 水をかけるのである。
- (16) ダルマを本性とする者は、このようである。彼は善き友人を得る。彼は、友人と財産を獲得するので、あの世でもこの世でも喜ぶのである。
- (17) 音、触感、色、味、香りにおいても、パーラタ族よ、人は支配を得る²¹。それがダルマの果報であると知られている (*viduh*)。
- (18) 彼は、ダルマの果報を得ても、満足しない、ユディシュティラよ²²。満足することなく、知識の眼によって厭離を得るのである。
- (19) 英知の眼によって、愛着に欠点のみを見る時²³、愛着に無関心になる。しかも、ダルマを捨てる (*vimuñcati*) ことはない。
- (20) 世界を滅を本性とすると見て、一切の棄却に²⁴向かって努力する。それから、正しくない方法ではなく、正しい方法に従って²⁵、解脱に向かって努力するのである。
- (21) 次第に厭離を得、そして悪しき行為を捨てる。ダルマを本性とするようになり、最高の解脱を得るのである。
- (22) 汝が私に尋ねたことは、以上のように述べられた。悪とダルマ、そして解脱と厭離も²⁶、パーラタ族よ。
- (23) それゆえ、どんな状態であっても (*sarvāvastham*) ダルマにおいて行為すべし、ユディシュティラよ。ダルマにおいて確立した者には、クンティーの子よ、永遠の成就があるであろう。

[266 章] (D.274 章, 9855-9873 K.280 章)

ユディシュティラは言った。

- (1) 祖父によって、解脱は、正しい方法に従って (達成され)、正しくない方法に従ってではない、と言われた (265.20d)。その (正しい) 方法について、適切に聞きたい、パーラタ族よ。

ビーシュマは言った。

- (2) 偉大な英知をもつ者よ、汝は、このことを完全に理解すべきである。(何故ならば) その方法によって、汝は常にあらゆるものを求めることができるからである、心清き者よ。
- (3) 瓶を作るときの意識 (*buddhi*) は、瓶が完成した時には存在しないのである、心清き者よ。(そのことは) ダルマを行う方法においても同様である。(解脱の) ダルマにおいては他の (ダルマの) 方法 (*kāraṇa*) は存在しないのである²⁷。
- (4) 東の海への道は、西 (の海) には至らない。解脱の道は唯一つである。それを私から詳しく聞くべし。

²¹ *prabhutvaṃ labhate* Cn. *prabhutvaṃ, saṃkalpasiddhatvaṃ /*

²² K. はこの後に次の一行を挿入している。 *dharme sthitānām kaunteya sarvabhogakriyāsu ca /*

²³ P.,K.: *kāme doṣaṃ evānupaśyati* D. *kāme rase gandhe na rajyate* D.,K. はこの後に以下の句を挿入している。

śābde sparśe tathā rūpe na ca bhāvayate manah / Cn. *bhāvayate, cintāvaśaṃ karoti /*

²⁴ P.,K.: *sarvatyāge* D. *dharmatyāge* D. では、*dharma* を捨ててから *mokṣa* に向かうことになり、P.,K. では *dharma* を維持したまま *mokṣa* に向かうことになる。

²⁵ *nānupāyād upāyataḥ* Cn. *na anupāyāt, upāyānanuṣṭhānāt, kiṃ tu upāyata eva /*

²⁶ P. *pāpaṃ dharmāṃ tathā mokṣaṃ nirvedaṃ caiva* D.,K.: *pāpaṃ dharmas tathā mokṣo nirvedaś caiva*

²⁷ *evaṃ dharmābhyupāyeṣu nānyad dharmeṣu kāraṇam /* N. *evaṃ dharmeṣu mokṣadharmeṣu śamadamādiṣu nivṛtirūpeṣu ālokavad vastutattvābhivyamjakeṣv anyat pravṛtirūpo dharmāḥ kāraṇam na /* Ganguli は、N. に従って、この箇所を *pravṛtidharma* と *nivṛtti* の関係においてとらえ、この詩節の意味を、天界の果報などは、*pravṛtidharma* によって求められ、解脱は *nivṛtidharma* によって求められと述べている。(p.280, fn.1)

- (5) 寛容によって怒りを断つべし。意欲 (samkalpa) を避けることによって愛欲を (断つべし)。意識 (sattva 注意力、集中力) を用いて、確固として、睡眠を断つべし。(Cf. Hopkins[1901] p.339 yoga の五障)
- (6) 不放逸によって恐怖を²⁸遠ざけるべし。知田者をたびたび思うことによって²⁹、氣息を (制御すべし)。願望、嫌悪、愛欲を堅固な心によって (dhairyeṇa) 忌避すべし。
- (7) 過誤、迷妄、疑惑を³⁰実修によって忌避すべし。睡眠も空想も³¹知識の実修によって (忌避すべし、) 真理を知る者は。
- (8) 急病や病弱を、適切な消化のよい少量の食事によって、食欲と迷妄を満足によって、外的なもの (viṣaya) を真実の見によって (忌避すべし)。
- (9) 憐れみによってアダルマを、無関心によって³²ダルマを、征服すべし。未来性の故に³³願望を、執着の忌避によって事物を (artha) 征服すべし。
- (10) 賢者は、無常性によって愛情を、ヨーガによって³⁴空腹を、慈悲によって自分の自惚れを、満足によって渴愛を (征服すべし)。
- (11) 発奮によって怠惰を、決断によって疑念を³⁵征服すべし。沈黙によって多弁を、勇気によって恐れを征服すべし。
- (12) 統覚によって (buddhyā)、言葉と意志 (manas) を制御すべし。それ (統覚) を知識の眼によって³⁶制御すべし。知識を大きなアートマンが³⁷制御すべし。それ (大きなアートマン) をアートマンの寂靜が制御すべし³⁸。
- (13) 詩人たちが五種と知るヨーガの誤りを断ち切った後に、このように静まった清浄な行為によって (アートマンは?) 認識されるべし。
- (14) 愛欲、怒り、食欲、恐れ、そして五番目として睡眠、これらを打ち捨てて、次に挙げるヨーガの手段を³⁹行うべし。
- (15) 瞑想、ヴェーダ学習、布施、真実、羞恥、誠実、寛容、清浄さ、食事に関しての浄化、そして感官の統御、
- (16) これらによって、生命力 (tejas) が増大し、(これらは) 罪を除く。この者のもろもろの意欲 (samkalpa 願望) は完成し、認識が生じる。
- (17) 罪を振り落とし、生命力にあふれた彼は、軽い食事をとり、感官を制御し、愛欲と怒りを支配した後、(自らを) ブラフマンの境地に導くことを願うべし⁴⁰。
- (18) 愚かでないこと、執着なきこと、愛欲と怒りの忌避、落胆なきこと、高慢でないこと、静謐、安定、

²⁸ bhayaṃ Cn. bhayaṃ lokāpavādajāṃ rajjāṃ /

²⁹ kṣetrajñāśīlanāt Ca. (reading -sevanāt) kṣetrajñāsevanāt, ātmany eva manoniveśanāt manaḥsahacarasya vāyor api nivṛttiḥ sukarā / tena vāyunirodhad api manasā ātmani niveśanam / (kṣetrajña=manas という理解のようである。)

³⁰ āvartam Cn. āvartam, ā samantād vartata iti vṛtṭipattiyā ankekoṭisparśinaṃ saṃśayam /

³¹ P.,D.: ca pratibhāṃ K. cāpratibhāṃ Ca. pratibhā kavivahetuḥ ātmajñānapratīpaḥ / Cn. pratibhāṃ, anyānusamdhānam / Cs. pratibhā, samādhivelāyāṃ bāhyasmṛtiḥ /

³² P. upekṣayā D.,K.: avekṣayā Ca. upekṣayā, phalānabhisamdhānena /

³³ āyatya Ca. āyatya, uttarakālabhāviphaleṇa doṣavattayā / Cv. āyatya, āsamantāt, ayatyā, aprayatnena / 願望は、未だ実現していない不確かなものであるから、ということか。

³⁴ yogena Cn. yogena, vāyunigraheṇa / Cs. yogena, ātmaśāna /

³⁵ vitarka YS 1.17 vitarkavicārānandāsmītarūpānugamāt saṃprajñātaḥ / YBh.1.17 vitarkaś cittasyālabane sthūla ābhogaḥ / sūkṣmo vicārah / (有想三昧) YBh 2.33 yadāsy abrahmaṇasya hīmsādāyo vitarkā jāyeraṇ (妄想)

³⁶ jñānacakṣuṣā Cs. jñānacakṣuṣā, pratyagātmarūpeṇa

³⁷ P.,K.: ātmā mahān D. ātmāvabodhena Ca. mahān aśeṣaviśeṣalokaḥ /

³⁸ P. yacchec chāntir ātmanaḥ D. yacched ātmānam ātmanā K. yacchej jñānam ātmanaḥ

³⁹ P.,K.: tathemān yogasādhanān D. yatavāgyogasādhanān

⁴⁰ niṇṣed brahmaṇaḥ padam Cn. niṇṣet, netum icchet, ātmānam / kutra, brahmaṇaḥ padam /

- (19) これが、澄んだ、汚れなく清浄な解脱の道である。このように、身口意を、欲望から離して⁴¹、制御しなければならない。

[267章]⁴²(D.275章, 9874-9913, K.280章)

ビーシュマは言った。

- (1) ここで人々はこの古譚を語る。ナーラダ仙とアシタ・デーヴァラ仙の対話を。
- (2) 長老デーヴァラ仙が座っているのを、理知ある者の中ですぐれたナーラダ仙は、生き物の生成消滅について尋ねた。
- (3) この動くもの動かぬもの一切はどこから創造されたのか、バラモンよ。そして消滅するとどこに行くのか。尊者は、これを私に語るべし。(Cf.MBh.XII.175.1)

アシタ仙は言った。

- (4) 時が⁴³、本性に突き動かされて⁴⁴、存在物 (bhūta 生き物) を創造するもの、それを五つの大きな元素と、元素を考察する人々 (bhūtacintaka) は言った。(Cf.Hopkins[Great Epic] p.155; Sāṃkhya schedule)
- (5) 時は、本性に突き動かされて、それらから存在物を創造する。それらとは別のものを⁴⁵語る者がいれば、彼は、正しくないことを語っていることになる。この点については疑いがない。
- (6) ナーラダよ、これら五つの元素を、永遠にして⁴⁶不動不変であり、本性として時を六番目とする大きな熱力の⁴⁷塊であると知るべし。(Cf.Hopkins[Great Epic] p.165; The seventeen)
- (7) (五つとは) 水、虚空、地、風と火である。これらの元素とは別のものは認められない⁴⁸。このことは明らかである。
- (8) 証拠もなく、あるいは論議もなく、これを正しくないと言ってはならない。このことは疑いない。これらを、これら六種をその (tejas) 塊であると知るべし。
- (9) これら五種と時、そして有と無のみ⁴⁹という八種の不変の要素が、存在物の生成消滅である。(Cf.MBh.XII.244.2)
- (10) (生き物が)(死後) 無から誕生する場合⁵⁰、それら (五元素) から生じる。また、生き物が滅すれば、それらとして五通りに⁵¹存在する。
- (11) その身体は地からなり、耳は虚空から生じる。目は太陽、息は風であり、そして水から血が生じる。(Cf.Hopkins[Great Epic] p.177; 地からなる身体)
- (12) 二つの目、鼻と耳、皮膚、五番目として舌が感官である。感官は感官の対象を知るものである⁵²と詩人 (kavi) たちは知っている。

⁴¹kāmato 'nyathā Cn. kāmato 'nyathā, kāmavaiparītyena niṣkāmaḥ niyamah, yogaḥ kartavyah /

⁴²この章は、第3詩節から Edgerton[1965] pp.287-290 に英訳されている。

⁴³P.,K.: kālo D. kāle Cn. kālāś caturyugātmā / adharme rataḥ, adharmaṃ tityakṣuḥ, dharmārambhī, dharme rata iti caturvidhaḥ kalidvāparatretākr̥tuyugasamjñāḥ /

⁴⁴bhāvaprācoditāḥ Cp. bhāvaprācoditāḥ, bhāvena, paramātmānaḥ prācoditāḥ

⁴⁵param Ca. param, prakṛtyādi / Cn. cetanam īsam acetanam pradhānam vā / Cv. param anyad ajñānakāraṇam ye brūyuh te asatyam brūyuh / Edgerton[1965]: something other (or, higher)

⁴⁶śāśvatān cp. śāśvatān, nityān, kāryapravāharūpeṇa /

⁴⁷mahataś tejaso Cn. mahataḥ mahattattvākhyasya buddhisūkṣmasya / tejasah, sattvapradhānyena prakāśamayasya /

⁴⁸P.,K.: asiddhiḥ param etebhyo bhūtebhyo D. nāsīd dhi paramaṃ tebhyo bhūtebhyo

⁴⁹bhāvābhāvau ca kevalau Cn. bhāvo, bhāvanam, pūrvasamskārah / abhāvo 'jñānam / Cv. bhavaty ebhyo jagad iti bhāvah, sukṛtaduṣkṛtātmaṇam karma / abhāvah prāgabhāvah /

⁵⁰P. abhāvād bhāviteṣv eva D. abhāvaṃ yānti teṣv eva K. abhāvabhāviteṣv eva Cv. abhāvah nāśah, tena bhāvitā utpattiḥ, abhāvabhāvitā / Cf.Edgerton[1965] p.287,fn.2.

⁵¹pañcadhā Ca. pañcadheti vacanaṃ pravayaktadr̥ṣṭatvārtham /

⁵²jñānāni Cv. jñānāni, jñāyante yebhyas tāniti vyutpattiyā jñānakāraṇāni /

- (13) 見ること、聞くこと、嗅ぐこと、触ること、そして味わうことを、五種の属性として、五(つの感官? Edgerton[1965]: elements) に五種類あると、推理によって (upapattyā) 知るべし。
- (14) 色、香、味、触感、そして音声はその(元素?)属性である。五つの感官によって、五種(の属性)が五種類知覚される (upalabhyante)。
- (15) 色、香、味、触感、そして音声というこれらがその属性である。この属性を、感官は認識しない⁵³。地田者がそれらを用いて認識するのである (budhyate)。
- (16) 心は (citta)、感官の集合よりも上位であり、それよりも思考器官 (manas) が上位である。思考器官よりも統覚 (buddhi) が上位であり、統覚よりも地田者が上位である。(Cf.Hopkins[Great Epic] p.161, fn.2; citta lower than manas)
- (17) 感官によって知覚された対象すべてを決定する人は⁵⁴。そして、思考器官によって吟味して、後に統覚によって決定するのである。。(Cf.MBh.XII.187.11, 239.14)
- (18) 心、感官の集合、思考器官、そして八番目として統覚、これら八種を、認識器官と、大我を考察する人々は言う。
- (19) 手足、肛門、性器、そして五番目として口と列挙された行為器官についても聞くべし。
- (20) 口は、しゃべり食べるための器官である、と言われる。両足は進行の器官であり、両手は行為をなすための(器官である)。
- (21) 肛門と性器は放出のための器官であり、同じ行為をなす。大便の放出と愛欲における放出とである。
- (22) 力が⁵⁶第六番目である。これら六種が言葉によって正しく伝承に従って(述べられた)。認識と行為の器官の属性すべてを、私は列挙したのである⁵⁷。
- (23) もろもろの感官が疲労によって、その行為から静まる時、感官の静寂によって、人は眠るのである。
- (24) 感官は静まったが、思考器官が静まらず、対象に向かうならば、その知識から人は夢を見るのである。
- (25) 状態 (bhāva) には、純質的な状態、そして激質的、翳質的な状態がある。人々は、(それらの状態を)純質的な行為に結びつけたもの、あるいは他の状態の行為と結びつけたものと⁵⁸述べる。
- (26) 歓喜、行為の成就、理解、最高の境地は純質的な人の (sāttvikasya) 目印である。(夢の中の行為を可能にする)記憶は(三種の)状態に依存する。
- (27) 一人の一人の⁵⁹人間においては、このように状態が行為として現われるのである (vidhim āsthitāḥ)。(覚醒時と夢の)二つの状態に⁶⁰常に望まれるのは、明白な消失である⁶¹。

⁵³na budhyate Cv. na budhyante, svaśaktyā na bodhayanti /

⁵⁴P. indriyair upalabdhārthān sarvān yas tv adhyavasyati D. indriyair upalabdhārthān buddhimāms tu vyavasyati K. indriyair upasrṣṭārthān matvā yas tv adhyavasyati

⁵⁵cetayate Ca. cetayate, viśayadarśanamātram cetanā /

⁵⁶balam Cn. balaṃ pañcavṛttih prāṇaḥ / etena, sāmānyakaraṇavṛttih prāṇādya vāyavaḥ pañca(SK29) iti sāmkyānām sammatāḥ prāṇasyendriyānatirekapakṣaḥ parāstāḥ /

⁵⁷P. sarve saṃśabditā mayā D.,K.: sarveṣāṃ śabditā mayā

⁵⁸P.,D.: itarāms tathā K. netarāms tathā

⁵⁹jantusv ekatameṣu Cv. ekatameṣu, atyantabhinneṣu jantusv /

⁶⁰bhāvayor dvayodḥ(D. tayoh) Cn. bhāvayor iti dvitvaṃ jātyabhiprāyam, jāgradbhāvajātyāsyā svāpnabhāvajātyāsyā ca / Cv. dvayoh dvayoh aihikapāratrikayoh /

⁶¹P. pratyakṣagamaṇaṃ dvayoh D. pratyakṣaṃ gamaṇaṃ tayoh K. pratyakṣaṃ gamaṇaṃ dvayoh Edgerton[1965]: These two states (waking and dream) have a manifest access to the ever desired (state; of deep sleep?)

- (28) 感官と状態は、十七種の構成要素 (guṇa) であると伝えられている⁶²。それらにとって第十八番目が靈魂 (dehin) であり、それは身体の中で永遠な存在である。(Cf.Hopkins[Great Epic] p.34, fn.1; the group of seventeen)
- (29) そして (atha vā)、靈魂 (saririn) にとってこの構成要素はすべて、体と共に存在している。(身体に) 依存するそれらは、身体を離れると、身体と共に存在することはない。
- (30) そして、この集合が五元素からなる身体である。一種と十種と八種の構成要素⁶³をあわせ (saha)、体熱と共に、これら二十(の要素) からなり、五元素よりできた集合が、もろもろの靈魂にとっての(身体である)。
- (31) かくして「大きなもの」が、風と共に身体を維持する。それが(大きなもの、風) 状態と結びついていることの目印は⁶⁴、身体の分離において現われる。
- (32) 何物かが (kimcit) 生じると同じように、善悪の(行為の影響の) 消滅が終わると、五種(の元素) の状態に至る。時が経ってから (kālena tato)、それ(靈魂) は善悪に動かされ、行為によって生じる身体に入る。
- (33) この地をもつ者(靈魂) は、時によって突き動かされて、身体を捨てることを繰り返し、抛り所を得ると⁶⁵、身体から身体へ移る。あたかも (vā) 壊れた家から⁶⁶(別の) 家に行く(ように)。
- (34) この点に関し、確信の確固とした賢者たちは悲しまない。しかし、(自分は) 束縛ある者と考える哀れな者たちは悲しむのである。
- (35) なぜならば、この者は何にも属さず、何者でもなく、これには誰も属さないのであるから。この者は常に単独で存在し、(自分の) 身体において苦楽を経験するからである。
- (36) 人は、生まれることもなく、死ぬこともない。人は、身体を享受した後、いつか最高の境地に赴くのである。
- (37) 行為が蓄積されたため、善悪からなる身体を捨て、身体を滅した靈魂は、さらに (punar)、ブラフマンに⁶⁷近づく。
- (38) 善悪の滅のために、サーンキヤの知識が規定されている (vidhīyate)。善悪が滅すると、彼はブラフマンの状態に⁶⁸最高の境地を見出すであろう。

[268 章] (D.276 章, 9914-9927, K.282 章)

ユディシュティラは言った。

- (1) 兄弟、父、息子、親戚、そして友人たちは、悪しき意識をもつ (pāpabuddhiḥ) 残酷な我々によって、財産のために殺されるのである。
- (2) この財産より生じる渴愛とは何か。どうすれば、祖父よ、我々はこの渴愛を滅すことができるのか。我々は渴愛によって悪を⁶⁹為すのである。(Cf.Hopkins[Great Epic] p.147, fn.3; この章の仏教思想と関連)

⁶²indriyāṇi ca bhāvās ca guṇāḥ saptadaśa smṛtāḥ / Ca. indriyāṇy ekādaśa, bhāvāḥ prayatnacetanābuddhayaḥ, guṇāḥ sattvarajastamāṃsīti saptadaśa / Cn. pūrvoktāni caturdaśendriyāṇi, sātvikādayo bhāvāḥ, ete saptadaśa guṇā bhoktur aṣṭadaśasyātmano bhogyāḥ /

⁶³Edgerton [1965]: I cannot make sense of these enumerations.(p.290,fn.1).

⁶⁴P. tasyāśya bhāvayuktasya D. tasya prahāvayuktasya K. satyaprahāvayuktasya

⁶⁵kṛtāśrayaḥ Cn. kṛtāśrayaḥ avidyākāmakarmabhir niṣpāditadehāntaraḥ /

⁶⁶viśiṅṇād vā Ca. viśiṅṇād vā, vāśabdād upamāyām /

⁶⁷brahmatvam Cv. brahmatvaṃ, bṛhadabṛhadvṛddhāvītidhātoḥ svayogyasukharūpasukhena pūrṇatvam /

⁶⁸brahmabhāve Cv. brāhṃe bhāve, brahmasaṃbandhivijñāne sati /

⁶⁹P. pāpaṃ hi tṛṣṇayā D.,K.: pāpāni tṛṣṇayā

ビーシュマは言った。

- (3) ここでも人はこの古譚を語る。質問するマーンダヴィヤに対するヴィデーハ王(ジャナカ)によって歌われた(古譚)を。
- (4) 何も持たない私は、大変安楽に生きている。ミティラーが焼けたとき、私のものは何も焼かれなかった(dahyati)。(Cf.MBh.XII.170.18, 171.56; Dhammapada 200 by W.Rau, Uttarādhyayana Sūtra 9.14, Hopkins[1902])⁷⁰
- (5) 財産は多ければ、実に苦であると知るべし。しかしまた、少しであっても、常に愚かな者たちを迷わす。
- (6) 世間における愛欲の安楽であっても、天界の大安楽であっても、渴愛の滅による安楽の十六分の一にも及ばない。(Cf.Hopkins[Great Epic] pp.69, p.428, No.196; 定型表現「十六分の一にも及ばない」; Hopkins[1923] p.136)
- (7) 時が経って成長した牛の角が大きくなるように、渴愛は、増加した財産とともに大きくなる。
- (8) あるものが自分のものとして考えられるならば、それはなくなっても、苦しみのために再び生じる。(Cf.MBh.XII.168.41)
- (9) 愛欲に執着することなかれ。愛欲における歓喜は苦である。財産を得た後、ダルマにおいて用いるべし。愛欲を避けるべし。
- (10) 賢者は、あらゆる生き物において、虎の肉のごとくに⁷¹あるべし。為すべきことを為し、清浄な本性をもつ者は、一切を捨てる⁷²。
- (11) 真実と虚偽の両者を捨て、悲嘆と歓喜、好悪、畏れと無畏とを(bhayābhaye)完全に捨てた後、(彼は)寂靜にして病はない。
- (12) 悪しき考えを持つ者によっては捨てがたく、老いつつあるものにとって老いることのない、そして致命的な病気である渴愛を捨てる者には安楽がある。(Cf. MBh.XII.168.45)=(var.) Bhāgavata P. 9.19.16)
- (13) 己の善行を、月の清浄さをもち病なきものと見つつ、ダルマを本性とする者は、死後もこの世でも、容易に(yathāsukham)名声を得る。
- (14) 王のその言葉を聞いて、再生族マーンダヴィヤは歓喜に満たされた。その言葉を礼拝して、マーンダヴィヤは解脱に達した。

[269章](D.278章, 9967-9989, K.284章)

ユディシュティラは言った。

- (1) いかなる性格の者が、いかなる振舞いの者が、いかなる学問ある者が、何に専心する者が、ブラクリティよりも上位の永遠なるブラフマンの境地に達するののか。(Cf.MBh.XII.222.1)

ビーシュマは言った。

⁷⁰Mithilā 炎上に関するこの詩節に関しては、入山淳子「ミティラー炎上の詩節をめぐって」(『江島恵教博士追悼論集-空と実在-』春秋社2000年11月, pp.501-521)、「ミティラー炎上の詩節をめぐって2」(『仏教文化研究論集第5号、平成13年3月 pp.99-149)に詳細に検討されている。

⁷¹P.,K.: vyāghramāṃsopamaḥ D. ātmanasopamo Ca. vyāghramāṃsopamaḥ, yathā vyāghrasya māṃse prāpte upayogo māṃsānudhyānavarjanam, evaṃ yogyapadārtheṣu yatnaprāpteṣu upabhogaṃ kuryāt, na teṣu satataṃ satṣṇaḥ syāt / Cp. vyāghrasvikṛtya māṃsam anyathā ko 'pi mama bhogasādhanam bhviṣyatīti nābhimanyate, tadvad vidvatsu yathā ko 'pi nābhimanyate tathā niṣkāmo bhaved ity arthaḥ / Cs. vyāghramāṃsopamaḥ, vyāghramāṃsam śītaḥ ity arthaḥ /

⁷²P. sarvaṃ tyajati vai saha D. sarvaṃ tyajati caiva ha K. sarvaṃ tyajati vai svayam

- (2) 解脱の教えに喜び、食事少なく、感官を制御したる者が、プラクリティよりも上位の永遠なる最高の境地に達する⁷³。(Cf.MBh.XII.222.2)
- (3) 聖者は、自分の家から出て、得失に関して等しく見、蓄積した欲望を⁷⁴顧みることなく歩むべし。(Cf.Manu 6.41)
- (4) 目によっても、心によっても、言葉によっても、非難してはならない。直接的にせよ、間接的にせよ、誰に対しても非難を口にしてはならない。
- (5) 生き物はすべて殺すなかれ。慈悲の道を⁷⁵進むべし。この世の命を得た後は (idam jīvitam āsādyā)、誰とも争いをなすなかれ。(Cf. MBh.III.203.45, Manu 6.47; Hopkins[Great Epic] p.43, mairāyaṇagataś caret, a strange expression)
- (6) 傲慢な言葉に (ativādān) 耐えるべし。決して自惚れるなかれ。怒りつつも心地よく話すべし。怒鳴られてもよき言葉で語るべし。(Cf. Dhammapada 320 by W.Rau p.173, Manu 4.47-48, Bhāgavata P. 12.6.34)
- (7) 村の中では、道の右側を、そして左側を⁷⁶、行くことなかれ。かつて招かれた者は⁷⁷、窮地に陥らなければ、(その家に) 乞食に行くことなかれ。
- (8) ものを投げられても、引き留められても⁷⁸、言葉によって不快なことを話すなかれ。優しくあるべし。無慈悲であってはならない⁷⁹。畏れなく、怒ることなかれ⁸⁰。
- (9) 炊煙なく、杵が置かれ、炭火なく、人々が食べ終わり、食器を片付けた時に⁸¹、聖者は施しを得ることを願うべし。(Cf.MBh.XII.9.22, 234.8, Manu 6.56)
- (10) 命の維持のために (?anuyātrikam)⁸²、ものの(わずかの)量を得ることに興味を持ってはならない⁸³。(食べ物)が得られなくとも失望することなく、得てもそれを喜ぶことなかれ。(Cf.Manu 6.57)
- (11) (他人が望むのと) 同じものを得ようと⁸⁴望むなかれ。尊敬されて(得たものを)食べてはならない。そのような者は、尊敬されて獲得することを避けようと願うべし。(Cf.Manu 6.58)
- (12) 食べ物欠点を非難するなかれ。(食べ物)のよき性質を好むなかれ。常に閑静な所の臥所と座所とを好むべし。(Cf. Dhammapada 185 by W.Rau)
- (13) 空の家、木の根、荒れ地、洞窟、(あるいは)訪問を知られることなく他の場所に行った後、そこは別のところで⁸⁵休むべし (saṃviśet)。

⁷³K. はこの詩節の後に、次の詩節を挿入している。

atrāpy udāharanīmam itihāsam purāṇanam /
harītena purā gītaṃ taṃ nibodha yudhiṣṭhira /

⁷⁴ samupoḍheṣu kāmeṣu Cn.,Cs.: samupoḍheṣu, upasthiteṣu (Cs. saṃmukheṣu) /

⁷⁵ mairāyaṇagataś Cn. mairāyaṇagatiḥ / mitraḥ sūryas tasyedaṃ maitraṃ, tadayaṇaṃ gamanaṃ, tac ca mairāyaṇaṃ tatra gataḥ sūryavat pratyahaṃ vibhinnamārgaḥ, aniketāḥ, grāmaikarātra vidhinā cared ity arthaḥ / Cp. mairāyaṇagataḥ, maitrīm āpannaḥ / Cs. ānukūlyam āgataḥ /

⁷⁶ P. pradakṣiṇaṃ prasavyaṃ ca D.,K.: pradakṣiṇaṃ ca savyaṃ ca Ca. pradakṣiṇaṃ brahmaṇo viśeṣaḥ, prasavyam anukūlam ceṣṭāviśeṣaḥ / Cp. pradakṣiṇaṃ prasavyaṃ ca grāmamādhyena na, strīdarśanabhiyā /

⁷⁷ P.,D.: pūrvaketitaḥ K. pūrvaketinaḥ Cn. pūrvaketitaḥ prānimantritaḥ Cp. nimantraṇapūrvakam ekabhikṣāgrahaṇam āpatkāla evānumantam ity arthaḥ /

⁷⁸ avakīrṇaḥ suguptaś ca Cn. avakīrṇaḥ mūdhaiḥ pāṃsubhiś channaḥ, dhikkṛtaḥ ity arthaḥ / tathaapi sugupto 'capalaḥ svadhame niṣṭhaavaan / (それでも、動揺せず、自分のダルマに確信をもって) Cs. pāṃsupaṭalādbhiś channaḥ / suguptaḥ garbhagrāhādiṣu niruddhaḥ / (寝室などに引き留められても)

⁷⁹ P.,D.: apratikṛto K. apratikāro Ca.,Cp.: dveṣiṇaṃ prati pratikiryārthaṃ krauryam anāśritaḥ apratikūlaḥ (Cp. -krūraḥ) /

⁸⁰ P.,K.: aroṣaṇaḥ D. akatthanaḥ

⁸¹ aṭṭe paatrasaṃcaare (食器を廻し終わった時に) Manu: vṛtte śaraavasampaate N. paatraaṇaṃ pariveṣaṇapaatrahastanaṃ saṃcaare aṭṭite satiiti vṛtte śaraavasampaate ity anenaiva tad evoktam /

⁸² P. anuyātrikam arthasya D.,K. Manu 6.57c: prāyātrikamātrāḥ syān

⁸³ mātrālabheṣu anādrtaḥ / Cn. mātrā, āhārapūrtiḥ tatrāpy anādrtaḥ / Cs. mātrālabheṣu, parikarālabheṣu /

⁸⁴ labhaṃ sādharmaṇaṃ Cp. sādharmaṇaṃ, sarvalokasāmyaṇaṃ necchet kiṃ tu lokottaraṃ mokṣalābham icchet /

⁸⁵ ajñātacaryāṃ gatvānyāṃ tato 'nyatra N. anyāṃ paiśācim anyatrātmani / Ganguli: Without allowing his practicies to be known by others, or concealing their real nature by appearing to adopt others (that are hateful or repulsive), he should enter his own Self. (p.291)

- (14) 好意と敵意とを等しく見、不動にして恒常たるべし。行為する時、善行・悪行の両者に執着するな
かれ⁸⁶。
- (15) 苦行者は、言葉の勢力 (vega)、心の (manas) 怒りの勢力、獲得欲の勢力、腹と性器の勢力、これら
の勢力を、制御すべし。そうすれば (ca), 非難は、この者の心 (hr̥daya) を損なうことはないであろう。
(Cf.Hopkins[Geat Epic] p.465, No.15; triṣṭubh)
- (16) 称賛と非難に対して等しく、中間に立つべし。これが最高の浄化具であり、(遊行の)生活期におけ
る、(真の)遊行者である。
- (17) (彼は)大きな心もち (mahātmā)、よき誓約もち、調御し、あらゆるところで独立し、初めての
所を行き⁸⁷、温和にして、家なくも⁸⁸確固としている。
- (18) 彼は、林住期や家長期の者と、決して交わるべきではない。誰も獲得しようと思わないものを得よ
うと願うべし。この者に、歓喜は入ることはできない。
- (19) 賢者にとってこれは解脱であり、愚者にとっては疲労となろう。賢者にとってこれは完全な解脱道
である⁸⁹、とハーリタは語った。
- (20) あらゆる生き物に無畏を与えて、家から (出て) 遊行すべし。彼にはもろもろの光ある世界があり、
そして彼には無限性がふさわしい。

[270 章] (D.279 章, 9990-10024, K.285 章)

ユディシュティラは言った。

- (1) 「幸運あれ、幸運あれ」とあらゆる人々は我々に言う。しかし、我々よりも不幸な人は誰もいない。
- (2) 神々によって人間において誕生を得た後、クル族のすぐれた者よ、世間で尊敬されている者たちに
よって獲得される苦とは、祖父よ、
- (3) いつ我々は苦の棄却を⁹⁰行なうことができるのか、苦とは身体を維持することである、クル族のす
ぐれた者よ。
- (4) 十七種のもの、五種の原因、感官の対象と属性の八種から⁹¹ 解放された、父方の祖父よ、
(cf.Hopkins[Great Epic] p.167; freed from the seventeen)
- (5) 誓約に誠実な聖者は⁹²再生しない。国を捨てた後、我々は、いつそのようになるのか、敵を苦しめ
る者よ。

ビーシュマは言った。

⁸⁶D...K. は、次に以下の詩節を挿入している。

nityatṛptaḥ susamtuṣṭaḥ prasannavadanendriyaḥ /
dhyānājayaparo maunī vairāgyaṃ samupāśritaḥ /
asvantaṃ(K. abhyastaṃ) bhautikaṃ sargaṃ paśyan bhūtātmikāṃ gatim /
niḥspṛhaḥ samadarśiṃ ca pakvāpakvena vartayan /
ātmārāmaḥ prasāntātmā lagvāhāro nirāmayah /

⁸⁷apūrvacārahā Cn. apūrvacārahā, pūrvāśramīyeṣu deśāptādiṣu caratīti, tadanyaḥ /

⁸⁸P.,D.: saumyo aniketaḥ K. saumyo hy aniketaḥ P.,D. の sandhi は不規則。K. の hi は hiatus breaker, これによって sandhi は規則
的になっている。

⁸⁹mokṣayānam idaṃ kṛtsnaṃ yāna の意味について、Hopkins は、仏教における用法との関連を示唆している。(E.W.Hopkins, A
Buddhist Passage in Manu, JAOS vol.43 (1923) p.24 6.)

⁹⁰P.,D.: sannyāsaṃ duḥkhasaṃjñakam K. sannyāsaṃ duḥkhabheṣajam Ca. sannyāsaṃ duḥkhasaṃjñakam, duḥkhasannyāsaṃ,
duḥkhatyāgam ity arthaḥ / yadvā duḥkhasādhyatvena prajñānam ity arthaḥ / Cp. duḥkhasaṃjñakam, antarbhūtañjartho 'yaṃ prayogaḥ /
prakāralopo vā, duḥkhasaṃjñakam / saṃpūrvasya jñādhātoḥ chedane 'pi prayogaḍṛṣṭeḥ, yathā paśuṃ saṃjñāyātīti, duḥkhaçchedakaṃ vā /

⁹¹saptadaśabhir N. saptadaśabhiḥ pañcaprāṇā dve manobuddhī daśa jñānakamendriyāṇi taiḥ hetubhūtaiḥ muktivirodhitayā
saṃsāravardhakaiḥ pañcabhiḥ 'kāmaṃ krodhaṃ ca lobhaṃ ca bhayaṃ svapnaṃ ca pañcamam' ity prāguktair yogadoṣaiḥ indriyārthaiḥ
śabdādibhiḥ guṇaiḥ sattvādibhiḥ aṣṭābhiḥ pañcasthūlabhūtāni avidyāhaṃkāraḥ karmāṇi ceti aṣṭatṛiṃśatā gaṇena vimuktāḥ /

⁹²saṃsītavratāḥ Cs. saṃsītavratāḥ iti kāyaniyamaḥ, munayaḥ iti vāṇniyamaḥ, rāgaṃ hitveti manoniyamaḥ /

- (6) 大王よ、終わりなきものはない。一切は、現象の領域にある (samkhyānagocaram)。再生もまた現象として知られている (samkhyāta)。この世に不動なものはないのである。
- (7) そして、王よ、執着の故に、この(王位の?) 欠陥は理解されない。ダルマを知る者よ⁹³、努力によってのみ、時がたてば理解するであろう。
- (8) 人々の主よ、この個我 (dehin 靈魂) が常に善悪の支配者である⁹⁴。それより生じた暗闇 (tamas 無知) によって妨げられたとしても。
- (9) 湿気を含んだ風が⁹⁵、更に赤砒素のほこりに⁹⁶入ると、その色の風が、方位を染めているのが見られるように、
- (10) それと同様に、暗闇によって覆われた個我 (dehin) は、行為の結果によって色づけられ、(本来)無色であるが、色に依存して、身体において再生するのである。(Cf.Hopkins[Great Epic] p,179; The Colors of the Soul; Bedekar[1968])
- (11) 人が、知識によって、無知から生じた暗闇を除くとき、永遠なるブラフマンが輝くのである。
- (12) 汝によって、世間によって、そして神々によって⁹⁷崇拜されるべき、解脱した聖者たちは、(ブラフマンは)行為によっては到達されない⁹⁸と語る。それゆえ、偉大な聖仙の集団は(ブラフマンの念想を)やめないのである⁹⁹。
- (13) このために、かつての歌を、心をつにして聞くべし。支配 (aiśvarya 自在力)の消えたダイティヤの王ヴリトラはどのように行為したか、を(詠った歌を)。
- (14) 征服され、助けなく、王位を奪われても、ヴリトラは、唯一の認識に立って¹⁰⁰、敵の中で嘆くことはなかったのである、パーラタ族よ。
- (15) 支配力を失ったヴリトラにかつてウシャナスは言った。「今や征服された汝には恐れはないのか、ダーナヴァよ。」

ヴリトラは言った。

- (16) 真実によって、そして苦行によって、私は、衰退を知った後、生き物の去来を嘆くこともなく、喜ぶこともない。
- (17) 生きている者は (jīvāḥ)、時 (kāla) に突き動かされて、意に反して地獄に沈む。(そしてその一方で?) あらゆる聖なるものが(天界で)経験される、と賢者たちは言った。
- (18) (生き物は)時に突き動かされて、(地獄と天界に寿命として)割り当てられた時を (kālam gaṇitam) 消費した後には、残余の時によって、繰り返し誕生するのである。。
- (19) 何千の動物の母胎に行き、そして地獄にさえ行った後、生き物は (jīvāḥ)、意に反して、時の紐に縛られているために、誕生するのである (nirgacchanti)。

⁹³P. dharmajñā D.,K.: dharmajñāḥ Cp. dharmajñēti sambodhanād udyogahetur api eveti sūcitam /

⁹⁴P. īśo 'yaṃ D.,K.: neśe 'yaṃ Cs. īśaḥ svatantraḥ kartṛtvābhimānī /

⁹⁵añjanamayovāyuh (油煙 (añjana 顔料) からなる風) Ca. añjanaṃ kajjalam, tanmayaḥ / Cp. svato nīrūpo 'pi vāyus tamasa upamānam / N. añjanamayaḥ kajjalapracuraḥ / Bedekar[1968] As wind or air full of particles of black pigment looks of reddish colour, after having again come into contact with the powdered red arsenic and fills the quarters with tatha red colour, (p.330)

⁹⁶punar mānaḥśīlam Ca. manahśīlam rajas tu rajasah /

⁹⁷sāmāreṇa Cp. sāmāreṇety uktvā muktānām sarvotkarśakathanam /

⁹⁸ayatnasādhyam Cn. ayatnasādhyam, karmaprāpyam na anityatvāpatēḥ / Cp. brahmaprāpter jñānam eva sādhanam, na karmety āha — ayatnasādhyam /

⁹⁹na sāmyanti maharśisaṃghāḥ N. na sāmyanti brahmopāsanān noparamante /

¹⁰⁰buddhim āsthāya kevalām N. kevalām saṅgahīnam / Deussen: zur reinen Erkenntnis seine Zuflucht nahm.

- (20) 私は、このように輪廻している生き物を (jīvāni) これまでに見たことはない¹⁰¹。(しかし生き物の行き先は) 行為に応じて得ると、聖典に示されている。
- (21) (生き物は) 動物に行き、地獄に行き、人間に、そして神々に行くのである。まず苦業、好悪を行なった後に。
- (22) あらゆる世人は、運命の定めと結びついたものを¹⁰²獲得する。あらゆる生き物は常に、かつて行った道を行くのである。

ビーシュマは言った¹⁰³。

- (23) 時に関する思弁によって考察された (kālasaṃkhyānasamkhyāta) 創造・維持・最終目標を語る彼に、尊者ウシャナスは言った。「汝は何故、恐ろしい (bhīmān) 悪しき話をするのか」。(Cf. Hopkins [Great Epic] p.166, fn.1; sily talk (duṣṭapralāpāḥ))

プリトラは言った。

- (24) 汝にとっても、他の賢者にとってもこれはよく知られたことだが、私は、かつて勝利を欲して大きな苦行を行った。
- (25) 私は、生き物の香りを奪い取って、そして種々の味も奪って、三界を踏み歩き、自分の熱力によって増大した¹⁰⁴。
- (26) 私は、炎の輪によって囲まれ、空を行き、あらゆる生き物にとって打ち勝ちが多く、いつも恐れなく住んでいた。
- (27) 苦行によって得た自在力を、自分の行為によって失った。尊者よ、私は堅忍に立って、それを悲しむことはない。
- (28) かつて戦いを望む偉大な大インドラ神と共に、聖なる主ハリ・ナーラーヤナが¹⁰⁵(いるのが) 私には見えた。
- (29) すなわち、ヴァイクンタ¹⁰⁶、プルシャ、ヴィシュヌ、シュクラ、アナンタ、サナータナ、ムンジャ・ケーシャ¹⁰⁷、ハリ・シュマシュル、あらゆる生き物の祖父と呼ばれるハリ・ナーラーヤナがいるのが。
- (30) しかし、その苦行の残余が私に残っている今、私は、あなたに行為の果報とは何かを尋ねたい。
- (31) 偉大な自在性は、バラモンよ、いかなる種姓 (varṇa) において確立されるのか。そして何故再び、最高の自在性は停止するのか。
- (32) なぜ生き物は生きるのか。あるいはまた再び生まれるのか。いかなる最高の果報に達すれば、生き物は (jīva) 永遠に存在するのか。
- (33) いかなる行為によって、あるいはいかなる知識によって、梵仙よ、その果報を得ることができるのか¹⁰⁸。それを私に説明すべし。
- (34) このように告げられたかの聖者は、答えた。「王の獅子よ、私の言うことを聞くべし。人の雄牛よ、兄弟と共に、心を集中して。」

¹⁰¹P.,D.: jīvāny aham adṛṣṭavān K. hy ahaṃ bhūtāni dṛṣṭavān Cn. jīvāni, jīvanti bhūtāni / adṛṣṭavān, na dṛṣṭam adṛṣṭam, vyavahitam atītam anāgatādi ca / tat vāti gacchati prāpnotīti jānātīty adṛṣṭavān, atīndriyajñāni ahaṃ vedmīti śeṣaḥ / Cp. jīvānīti śaṅghatvaṃ(官宦性?) chāndasam /

¹⁰²P. kṛtāntavidhisamyuktaṃ sarvalokaḥ D.,K.: kṛtāntavidhisamyuktaḥ sarvo lokah

¹⁰³D.,K. には bhīṣma uvāca の語はない。

¹⁰⁴avardhaṃ Cn. avardhaṃ hiṃsītavān Deussen: gedieh ich

¹⁰⁵nārāyaṇaḥ Cp. nārāyaṇaḥ narasamūhasya jīvavargasya prerayitā /

¹⁰⁶vaikuṇṭhaḥ Cs. vikuṇṭho 'vaguṇṭhenam, dyāvābhūmyor ekīkaraṇam taṃ karotīti vaikuṇṭhaḥ / tathā ca nāmanirvacanādhyāye vakṣyati — saṃśleṣitā mayā bhūmir adbhir vyāptā ca vāyuna / vāyuna caiva tejaś ca vaikuṇṭhatvaṃ tato mama / iti /.

¹⁰⁷muñjakeśo Ca.,Cn.: muñjavat sudīrghāḥ (Cn.: pītāḥ) keśā asyeti /

¹⁰⁸P.,K.: brahmaṛṣe tat phalaṃ prāptuṃ D. tad avāptuṃ phalaṃ vipra